婦人と新社會

山田わか主筆

拾月號

每月一回一日發行　第八號　大正九年拾月一日發行

東京婦人と新社會發行

マイナー女史原著山田わか新譯（中判紙數四百頁價壹圓六拾五錢送料金拾三錢）

新刊

賣笑婦の研究

社會政策として將た又人道問題として賣笑婦の研究は忽諸に附すべからざるもの也卑むべき獸慾の犧牲となる彼等が墮落の經路や如何、生きながら餓鬼道に苦しむ彼等生活の表裏や如何。而かも之が救濟策は如何にすべきか。默過すべきか、撲滅すべきか。本書は多數の賣笑婦に親近し眞摯の態度を以て徹底的に之が研究をなしたるマイナー女史の名著を全譯したるものにして一般の士女は勿論、特に宗教家、政治家、教育家等の一讀を要すべきもの也。

平塚雷鳥女史著　定價金壹圓六拾錢送料金拾五錢

婦人と子供の權利

平塚雷鳥女史が新婦人の第一人者たるは世既に定許あり、刻下社會改造の激動中にありて、其想益奇警に、觀察愈透徹し來り、特に婦人と子供の爲めに其感想を披瀝せらる、『靑踏』のむかしより文名一世に高き女史の近業は悉く收めて本書にあり敢て一讀を薦む。

本間久雄氏著　四六大判箱入價壹圓六拾錢送料拾五錢

現代の婦人問題

著者此問題の研究に沒頭する事多年本書は其蘊蓄を傾けたるものにして先づ近代文學の中に描かれたる婦人問題より説き起して現代思潮との關係を論じ轉じて我國の本問題に論及して委曲を極む若き男女は勿論一般教育家爲政者等苟くも新趨勢に着目する人は是非本書を一讀せよ。

東京市麹町區飯田町壹の貳　株式會社　天佑社　電話番町長一一七九番　振替東京一〇一二八番

婦人と新社會

我が子が病氣をして醫者に危險を告げられた時、そして、俗に草木も眠ると云はれてゐる丑三ッ時、唯一人病兒を見守りながら、其の病兒の本復を祈る母の心！

そして、自分のゆだんなき注意によつて、必ず全快させて見せると、自分の心と病兒に誓ふ時の緊張した氣持ち！

そして、病兒が快方に向ふ徴候をかすかに現した時のさびたつやうな母の心！

この母心が現代の此の恐しい利己主義病及び勞働問題マニアに罹つてゐる社會を救はなければならないでせう。けれども、社會に對する其の力は今の處龍車に蟷螂の斧であるかも知れません。とは云へ、我が子の病に脅へるやうに世の中の惡德に戰慄し、我が子の幸福を喜ぶやうに世の中の善に跳る心の努力はいつか一度は必ず有力なものになるでせう。

けれども、それは十年後であるか二十年後であるか、或ひは又其母心の持主の目の黑い間には來ないかも知れません。が、それも止むを得ないことであります。唯、其母心のほとばしりの一端が極く少數の人の心にでも觸れることが出來たならばそれだけでも無意義ではないでせう。

いとしい我が子から愛してやつた報酬を期待する母は、どんなに世間は廣くともないやうに其の母心の持主は社會から報酬を得ようとはしないでせう。そして、それが本當の女性の仕事をして居るものであります。

此の社會奉仕の精神を持つ人の數が殊に婦人が或る程度迄殖へた時に其の時に、始めて平和の神が此の地上に降臨ますのであります。



本能の跋扈から本能の征服へ

一

新社會設定の要求が戰後の歐米の民衆の叫びであります。そして、其の叫びの裏面には、『人間の本能は變更出來ないものである。從つて、其の本能の要求を滿たし得る社會が最善なものである。』と云ふ意味が含まれてゐます。ルーソー主義でも、ニーチエ主義でも、マーキアビル主義でも、シンデカリズムでも、社會主義でも、ギルド主義でも、ボルシエビズムでも、其の點に付いては皆同じであります。今日迄人間が持

つてゐた人間の本質、則ち、本能を其のまゝにして置いて、そして、其の本能を滿足させ得るような社會を設定することが、彼等の目的であり、彼等の要求して止まない新しい社會組織であるのです。

けれども、彼等が信じてゐるように、人間性、則ち、人間の本能は果して改造出來ないものでありませうか。又、改造されない、今迄通りの本能の慾求が全く滿足し得るような社會組織が可能なものであるでせうか。私はそうは思ひません。人間の質が先づ變つて、そして、社會のかたちが徐々と變つて行くのでなければ永久平和は保てないものだと私は思つて居ります。

二

改造と云ふことを隨分長い間私共は聞かされて來ました。けれども、其の所謂改造の意味を詳細に調べて見ますとそれは皆たゞ破壞をすることでありました。『けれども新しく造る前には必ず破壞が必要である。』と云ふことを私共は又聞かされました。

併し、破壞に取りかゝる前に私共は必ず新らたに建設する計畫を持つてゐなければなりません。なぜなら、たとへて云ふと、古い家を取毀すには一坪二圓迄はかゝりませんが新しく家を建てるのには此の頃では一坪百五十圓はかゝります。毀すのと造るのとでは此の位費用に差があります。家ですらさうですから新社會の建設と云ふことは容易でないことを私共は思はなければなりません。建設は容易でないから、輕卒に破壞してはならないのです。

私共は哲學と云へば直ぐ獨逸を聯想します。そして、獨逸の哲學と云へば直ぐキャントを思ひ起します。キャントが哲學界の最大巨人であることを誰も拒むことは出來ません。彼の發見した眞理は今日の處ではまだ〳〵最大なるものでありますから。彼は其の眞理を發見するに付いて、則ち、其の建設的な仕事をするに付いて、どの位努力したかと云ふと、第一彼は眞理の發見には強く考へなければならないと考へました。強く考へるには生理狀態が健全でなければならない、そして、頭腦の强壯は熟睡に待たなければならないと彼は考へました。

其の考へに基づいてキャントは日々の生活を實に規則正しく致しました。食事に於て運動に於て彼は必ず規則通りにしてゐました。人は不規則な生活をしてゐても一時的な智識のヒラメキを持つことは出來ますが、併し、繼續しない一時的の智識のヒラメキは斷片的でありますから、それは大抵實行不可能な空理空論に終らなければならない、實行可能な理論を造るには繼續的の努力に待たなければならないと、そして、それは全く規則正しい生活に待つより外ないとキャントは考へて、そして、それを實行したのであります。起きる時間、寐る時間、食事する時間、運動する時間、讀書する時間、講義する時間をキャントはキチンと定めて置いて、其れを彼は決して動しませんでした。

キャントは熟睡に最も重きを置いてゐて他の一切の事柄は殘らず熟睡を得るために規定したのでありました。たとへば、食事の分量が多すぎたり不消化であつたりするならば必ず睡眠を妨げると云ふので、彼は食事の分量に正確な制限を置きました。そして、愉快に食事することは消化を助けると云ふので彼は必ず食事には友を呼ふので

ありました。けれども、散歩には彼は決して友を求めない。と云ふのは、友があれば自然話が出る、話をすれば必ず必要以上に冷たい空氣を吸つて肺臟を無用に働かせなければならないと云ふのであります。

彼は隨分高齢に達したのでありますが、とうとう海を見たことが無いと云ふことです。それは彼が決して旅をしなかつたからであります。旅をしない理由は、旅では折角造つた規則正しい生活を亂されなければならないからでありました。眞理の研究のために、規則正しい生活を亂されることを彼は最も怖れて居たのです。彼は一生を獨身で終つたのでありますが、これも矢張り眞理の研究のためであつたのです。結婚生活が彼の規則正しい生活に障害を與へはしまいかと云ふことを彼は憂慮したからであります。建設的事業は容易なものでないと云ふことの證據として、此處にキャントの嚴格な生活の仕方を擧げて見たのです。

キャントは『人間の幸福は其の習慣にある。』と申ました。『習慣と云ふものは人間が勝手に造り得るものだ。善き習慣を造るのも惡い習慣を造るのも其れは各自の自由

なものである。そして、各自の造つた其の習慣の種類によつて人は幸福でもあるし、又、不幸でもある。ものに滿足する習慣を造つた人はどんなものからでも滿足すべき點を見出すし、これに反して不滿を感ずる習慣を造つた人はどんなものからでも必ず不滿に思ふ點を發見するものである。前者は僅かを持つて幸福であるが、後者は持てば持つ程不滿を感ずる。故に、人の幸不幸は皆習慣にありと云へるのである。』と。

三

破すに易く、造るに困難であることを前に述べましたが、併し、今日の改造論者、則ち破壞論者でも建設に付いての提案を全く持つて居ないではありません。けれどもそれは、唯、主觀的に滿足してゐるに過ぎないものであつて、いはば、一種の純理の曲藝であります。とうてい實行出來るものではありません。もし、其れを無理に實行しようとするならば恐しい犧牲が必要になります。其の例は私共が今日知り得た露國の狀態であります。一度生命にヒヾを入れると何時かは死滅してしまうものでありま

す。不健全な改革や乃至革命は國家にヒヾを入れ易いものであります。そして、一度ヒヾが入つた國家は容易に健全な狀態に歸へれないと云ふ事實が國家には生命がつながつてゐると云ふことのしるしであります。けれども、新しく建設された若い國になると古い國程には革命に弊害が伴ひません。と云ふのは、まだ、基礎がしつかりとかつたまつてゐないので、革命がヒヾを入らすことにはならないで、却つて其れが基礎をかためる手段になるのです。併し、それも程度の問題で、南米のように始終革命騒をしてゐたのではツイには國家の基礎が枯れてしまはなければなりますまい。

一體、民衆の要求とか革命思想とか云ふものの根本を爲してゐるものは無產階級が有產階級を寄生虫視してゐるのです。處が、ズツと以前に立ち歸つて見るならば、今日の有產階級の祖先は非常に勤勉な精力家で子孫のために今日の地盤を造つて置いたのだと云ふことが分ります。そして、今日の大多數の、無產階級の祖先は怠けてゐたり、或ひは又、勤勉に働いてゐた人の上前をとつてゐた所謂寄生虫であつたのです。ですから、今日社會の寄生虫と云はれてゐる有產階級の祖先は寄生虫ではなく、今日の

無産階級の祖先が寄生虫であつたのです。それだからと云つて今日の無産階級は壓迫されてもよいなどゝ私は決して云ふものではありませんが、とにかく、有產階級を寄生虫視することの當を得て居ないことを云ひたいのです。

いづれにしろ、今日の有產階級に對する無產階級の不滿が改造問題の動機になつてゐることは事實です。そして、此の不滿を組織的に組み立てゝ一つの勢力にしたものは無產智力階級の不滿です。一體、人と云ふものは智力的に目覺めると同時に、自分の目から隱されてあるやうに思へるものを知ろう〳〵とする慾望を持つものです。そして好奇心を起したり、新しい感じを味つて見たいと云ふ慾望を起したり、野心を滿足させるための手段として智識を求めたり、權力を慾求したり、それ等が智力的に目覺めた人々の心をそゝつて、そして空想に耽らせる力となりました。そして、ツイに現代の革命思想と云ふものを構成してしまいました。智力的空想的覇氣を盛んならしめてしまいました。

四

處が、又、他の一方には新しい要素が生れました。そして、それは人類を結び付けてゐる相互扶助の紐を強くしようとするより善なより高尚な人類奉仕のために智識を用ひようとする慾望が活躍し始めました。一方に空想を基礎とした智力の活躍があるに反して、これは愛と同情を基礎とした智力の活躍です。此の愛と同情は、それが生れた處にヂッとして居たのでは發達もしなければ有效でもありませんが、それを他に移すことによつて效力が生じます。始めは自分に、最も親しい家族のものに其の愛と同情を移し、次には親類に友人に移して行きます。そして、其の愛と同情の輪がだん／＼廣くだん／＼深くなつて行くに從つて、自分の幸福、平和と云ふことがだん／＼深く味はれて來ます。そして、ツイには自分の味はつた其の幸福と平和を有形無形に無限に擴げて行かうとする慾望を持つようになります。ですから一方に革命的、則ち不滿と不幸の種があると同時に、又、一方にはそう云ふ平和の種も社會にはあるのです。こう云ふ種の持主が破壞的則ち、革命的方面には行かないで建設的方面に行く人

です。そして、此處に眞の文明の出立點があるのです。

人間性の改造は外部から爲されるものではなく、內部から爲されねばならぬものです、云ひかへれば、意志の力によつて自分自身の斷片的な特種な衝動を徐々と變へて行くことであります。キャントの云ふ善き習慣を造つて行くことであるのです。自覺した人間と云ふのは、さうして自己を徐々と變へて行く人のことです。私共が私共の本來の性質を倫理的に見ると云ふことは、自己を建設するために社會的責任を自覺することです。そして、今日の自分と未來の自分とを連結させることです。倫理的の自覺は他の自覺の姿から離すことは出來ません。

又、自分は醜いとか、のろまであるとか、無能であるとか云ふやうに自分をかへりみる其の感じは倫理的ではありませんが、併し其の種類の自己判斷のうちに、道德觀が伴ふならば其處に自己改造の手段が始まります。人は全體としての自分を見ることが出來る處に自己批評が現れて、そして、本能の中心、則ち、意志が各瞬間に起つて來る衝動を律することが出來るようになるのであります。人間の改造と云ふことは意

志の改造に過ぎないものでありますが、其の意志の改造も亦意志によらなければならないものです。そして、其の意志の本質はまだ一個の意志としてかたまつてゐないうち、つまり、まだ無意識の間に母親によつて造られるものであります。

一個の人間を、あゝしなければならない、こうしなければならないと云つて壓迫することは出來ます。けれども、さうすることによつて其の人間の本質を、つまり、本能を變へることは出來ません。本能そのものが變らなければ人間は變りません、前にも云つた通り人間を變へると云ふことは人間の意志を變へることであつて、其の意志を變へることも亦意志であつてそして、其の意志の性質は母親の意志教育によつて定まるものであります。

今後の此の地上に起る爭ひは、不平不滿にいらだつ革命的則ち破壞的思想と、愛と同情に燃ゆる建設的思想との衝突でありませう。そして、婦人の仕事は、後者、則ち愛と同情に燃ゆる建設的思想の潤澤を計ることであります。

米國婦人の生活と婦人參政權

米國に於ては憲法修正批准を公表する布告に國務卿コルビー氏が署名したことによつていよ〳〵全國の婦人が參政權を持つことになりました。そして、早くも、もう婦人は政治的に勢力を得たと云ふ證據には、今回の大統領候補ハーデング氏やコックス氏が婦人からの投票を得ようとして既に婦人の方面に運動を始めたようであります實に婦人の贊成不贊成によつて大統領候補の運命も左右されると云ふ狀態に、今、米國はなつたのであります。米國婦人の得意も想像に餘りありと云ふべしであります。ツイ、此の頃の、日本漫遊中の米國議員團の婦人達も本國に於ける婦人參政權批准の電報を見て以來、其の參政權の話で持ちきりであつたと云ふことを新聞紙は報じてゐました。處で、大統領の運命をも其の手のうちに握り得た米國婦人の私生活はどう云ふもの

でありませうか？　果して大統領の運命を左右するに足る程のしつかりした生活をしてゐるものでありませうか？　此處に少しく研究して見る必要があると思ひます。

勞資問題がやかましかつたことは隨分久しい間です。社會主義の發生と云ふことが既でに勞資問題の烈しいことの證據なのであります。社會主義の攻撃のマトになつてゐるものは資本主義であるように一般に考へられてありますが、併し、社會主義が攻撃してゐるものは資本主義とは無關係な世襲財產、地價增加、及び、獨占的利益から出て來る處の金利であります。

併し、それ等の世襲財產、地價、及び、獨占的利益も正當に利用すれば、則ち、社會の善と云ふことを標準に處置すれば皆有利な社會制度であつて、決して、社會を害するものではないのです。けれども、それが、其の理想に向つて行く道からは全く外れて、殆んど社會を無視した利己主義によつて處置されてゐるものですから弊害が百出して、そして、資本主義に迄累を及ぼして居るのです。

其處で、其の利己主義が起つて來る原因はいろ〳〵ありますが、其のうちの重もな

るものは先づ奢りをしたいと云ふことに歸してゐます。そして、誰の奢りかと云ふならば其れは重もに婦人の奢りであります。殊に其れが米國では甚しいのです。婦人の奢りたい心に滿足を與へるために男子は慾張ります。そして、それがやかましい勞資の問題を引き起します。

米國の男子は妻や娘を宏大な邸宅に住はせるために、立派な衣裳を造らせるために贅澤な宴會を催させるために、漫遊させるために、多くの雇人を使はせるために慾張ります。實に男子は女子の經濟上の奴隷になつてゐるのです。女子の虛飾の資金調達に吸々としてゐるのです。

處で、金力で得られるだけのものは得て、あらん限りの贅澤をし盡した果ては或る婦人などは今度は稱號が慾しくなりました。民主國を世界に誇る國に生れて居ながら貴族又は皇族の稱號を持ちたくなつたのです。これは我が國の平民の成金と同じ心理狀態でありませう。紐育の富豪グールド氏の娘などは其の一例であります。彼女は佛蘭西の以前の皇族ボニー親王と結婚したのです。そして、プリンセスの稱號を得たの

でした。それを得るために彼女は巨萬の金を使つたのですが、とう〳〵目的が叶つて有頂天になつてゐました。米國の娘達は平生は君主國の高位の人々をまるでデクノボウであるかのやうに惡口云つてゐながら、何にかの場合に謁見を給はるようなことがあれば、それこそ無上の光榮と心得ていつ迄もそれを自慢に思つてゐます。彼女達が歐州の貴族と交際することをどんなに希望してゐるかと云ふことは其れだけでも明瞭であります。

若い女達計りではありません。スタンフォード大學の創立者スタンフォード夫妻は自分の邸宅を伊太利の王宮にかたどつて喜びもし、誇つても居ました。其の外多くの富豪は歐洲の何處かしらの王宮をかたに普請をして、そして、喜んでゐます。

ですから、議論に於てはどんなに民主々義を主張して君主國を非難しても、實際には其の君主國の風を好むのであるし、事實又彼等の生活は却つて歐洲の君主國の皇族の生活よりも奢つたものであります。そして、其の風は富豪計りであるかと云ふとさうではなく、一般であります。米國婦人は贅澤をすることが人生の理想であり、そし

て、婦人に其の贅澤をさせたいと云ふのが男子の働く目的なのであります。

英國現代第一流の小説家バーリー氏の傑作『男性と女性』は此の頃活動寫眞に脚色されて日本でも可なり評判になつたようでありますが、あれは英國の貴族の生活を誇張したものであります。けれども、米國の富豪の生活はあれ以上だと云つてもいゝ位のものです。極くとびぬけた贅澤をしてゐる人々の生活をぬきにして、先づ、日本で云ふ中流以上の家庭を例にとれば、それには大體に於て先づ三種あります。其の一種は英國人の後裔、もう、一種は愛蘭人の後裔でそれからもう、一種は猶太人の後裔であります。其の外佛蘭西人、獨逸人、伊太利人其の他各國人の富豪がありますが彼等は先づ前述の三種の人々の生活に倣ふようになつてゐます。米國に歸化した歐洲人の富豪の多くはジャーマンジユーとか、フレンチジユーとか云はれてゐる所謂猶太系統に屬するものでありますから。

英國系統の富豪の生活は實に外形を立派にします。雇人を澤山使つて貴族的でありますが、アイランド系統の富豪は英國系統以上に外見を飾ります。そして、彼等の使

ふ雇人はどう云ふ種類のものかと申しますと、先づ第一に料理人、料理人の助手、掃除役、庭園係り、洗濯人、主婦附きの女中（レデーメード）主人附きの下僕（バレット）子供があれば子供の數だけの乳母が勿論あります。其の外に給仕（バトラー）は燕尾服を立派に着て、頭のさきからつまさき迄ピカ〳〵光るようにキレイにして御給仕をします。時によると其の給仕が數人あることがあります。給仕長に其の助手と云ふように。大きな家族になりますと其等の雇人の外に賄長（スチユアート）や家事監督（ハウスキーパー）があります。

英國人やアイランド人は生活の形式の素晴しいわりに食事は質素です。朝飯などは極く輕く、大抵は圖書室などで新聞を見ながらすましてしまいます。晝飯も献立は正式でも內容はあつさりしたものであります。其の代り、夕食には可なり贅澤な御馳走を食べますが、併し、其の御馳走よりも食器の立派であることは實に始めて見たものは喫驚します。實にこりにこつた燒物や金銀を使つて居るのです。處が、猶太人になると丁度それとは正反對です。食器は粗末でありますが、食物其のものの豐富で立派

なことは到底英國人やアイラン人のとは比較も何にも出來ない程のものであります。

併し、私が今お話しようとすることは米國人の食物の話などではありません。さう云ふ家庭の主婦の生活はどんなものであるかと云ふ處にあるのです。一體、米國の男子は有産階級無産階級を問はず皆活動的であつて怠けてゐる者と云ふのは殆んど無いと云つてもいゝ位のものです。富豪と云はれる人であつても日曜日をのぞく外は皆毎朝早く起きて各々の職務に從事します。從つて、朝食も早くなります。處で、主婦はどうして居るかと申しますと、まるで多くの主婦達が相談でもした結果のように大抵は主人の出かける時分になつても起きて來ません。主人は妻の眠つてゐる間にコッソリ出て行つてしまうか、さもなければ給仕を相手に一人朝飯をすまして帽子を手にして廊下から妻の寢室の方を向いて『××や行つて來ますよ』と呼びかけます。妻は床の中で『行つてゐらつしやい』位答へて置いて寢返へりでもして、又、グーッとねこんでしまひます。しばらくしてから目がさめるとベルをならして女中を呼んで、ねどこの上へ朝飯を運ばせて食べます。

病人でも無いものがねどこで御飯を食べるなど云ふことは實際私共日本人には考へられないことでありますが、併し、米國婦人は普通のことであるように思つてゐるようです。ねまきのまゝ寢臺の上に座つてゐて、いろんなものを運ばせて食べます。食べてしまうと、今度は寢臺の傍のテーブルの上にある卓上電話をとつて、ねころんだまゝ、あちこちの商人にものを注文したり、仕立屋や化粧品屋と話をしたり、友人と晩に芝居へ行く打ち合せをしたりします。それから起きると直ぐ風呂に入つて、そして、電話では間に合はなかつた買物などに出かけて半日を過します。

おひる後はすぐに念入りの御化粧が始まつてそれから訪問に出かけます。訪問時間は二時と三時の間ですから。さうでなければ矢張り着飾つて訪問客を待つてゐます。何曜日は何々夫人の訪問を受ける日と云ふのが定まつてゐますから。訪問を受けるか或ひは又、訪問をすることが終ると今度は夕飯の食卓につくためのおつくりが始まります。どなたでも御存じのやうに西洋人は御馳走を食べる時は衣服を改めるのです。そして、夜は親密な友人を訪ねて遊ぶか、芝居へ行くか、或ひは又音樂會に行くので

す。乳呑子があつても少しもかまいません。生れるとすぐ乳母につけて置くのですから。これが先づ上中流の米國婦人の生活です。

勞働階級の妻達はどうかと申ますと、彼女達は前述の中流以上の婦人の生活を眞似ることに吸々としてゐます。以前の勞働階級はどんな小さな家でも一軒の家を持つたものですが、此の頃は家を持つと云ふことをしません。大抵はアパートメントハウス先づ高等下宿屋と云ふような處へ住みます。夕飯には盛裝して大きな食堂へ行つて、着物を見せびらかしながら食事をしたいと云ふのが主なる理由であります。ですから子供を生むことを非常に嫌ひます。其のために避姙と云ふことが益々盛んになるのです。もし、子供があれば經濟の許す限りは乳母に任せて置きます。盛裝して夫の歸へりを待つて、そして、夫と手を携へて大食堂へ行くのです。それが何よりの歡樂であり、誇りであるのです。そして、食後は中流以上の婦人のように芝居へ行つたり友人を訪問したりするのです。

同じ勞働階級でももう少し下になると間借りをしてゐます。夫は自分で朝飯の仕度

そして、そして、まだ妻が寢てゐる間に仕事に出かけてしまひます。妻はゆつくり起きておつくりでもして、友人の處でも遊び歩いてゐて、夫が夕方歸へる迄はうちへより付きません。夕方は夫の歸へりを待つて、そして、二人して食事をしに出かけます

自分で料理をするような面倒を避けるためです。

其の外に工場に通ふ女、タイピスト、賣子、事務員と云ふ種類があります。彼女達は男の勞働者と同じように朝早くから出かけなければなりません。、夕方歸れば矢張り盛裝して、異性の友人を誘つて食事に行つたり、安芝居や、安音樂會に行きます。異性の友人を求むるわけは何處へ行つても其の友人が仕拂ひを持つからであります。

今迄に擧げて參りました厄介な婦人達の外に全米國婦人の二割乃至三割位本當に眞面目な家庭婦人や熱心な宗敎家があります。彼女達は我が國の律義な家庭婦人と同じように、朝は夫よりも先きに起きて女中を監督して家事の一切をはかどらせたり、子供の世話をしたりします同時に社會事業に努力したり、修養に心をとめたり、所謂内助の實をあげて居ます。

ざつと先づこう云ふのが米國の婦人であります。そして、これ等の婦人が今度いよ〳〵參政權を獲得したのであります。そして、既でに政治上大勢力を得たのでありま す。處で、今、最後にあげた眞面目な家庭婦人及び熱心な宗敎家は殆ど例外なしに參政權を希望して居りませんでした。男子とは仕事の種類こそ違ひますが、併し、人として妻として母として男子と同等な社會上有益な仕事をしてゐる其れ等の婦人が參政權を要求しないで、他の七割乃至八割の婦人、自分は性慾上男子の奴隷となり、經濟上男子を自分の奴隷としてゐる婦人達が猛烈に參政權を希望してゐたのであります。

こう云ふ婦人が投票權を使用することは、彼女達が性を資本として男子を贅澤の道具にしてゐると同じように、又、男子を政治上の奢りの具としてしまいはしないでせうか？

人をも自分をも奴隷としてゐる女が投票權の行使を望んで、人として妻として母として有益な婦人が其れを希望してゐないと云ふ處に私共の考へなければならぬことがありはしないでせうか？　婦人參政權は此處にまだ研究の餘地がありはしないでせうか？

青年男女の交際機關

結婚前の青年男女の交際。これは目下緊急を要する問題であります。全く見ず知らずの他人同志が、唯、一場の儀式によつて夫婦になり得る、合體し得ると考へることはあまりに人間の精神的方面を無視したことでありますから。從來は肉體的夫婦を造つて置けば精神的夫婦は其の後に徐々と造られて行くものであるやうに考へられて居ました。それが一ッの信仰になつて居ましたので人々は氣樂でありました。けれども其の信仰を失つてしまつた現代人はそう云ふ簡單な方法で配偶を選むことは出來なくなつてしまひました。

丁度、從來は神佛の御心で一切が解決されてゐたのに反し、現代人は其の神佛に批評眼を投げるようになつて、しかも其の神佛の代りになるものを發見し得ないで、精

神上大動搖を來し、不安な生涯を送らねばならなくなつてゐると同じように、從來の結婚の樣式を捨てゝ、そして、新しい樣式を持たない現代の靑年男女は不幸であるに相違ありません。

亞米利加の上流社會には一種の交際會がありまして其れが結婚媒介の機關になつて居ります。それは俗にフォアハンドレッド『四百人』と稱ばれて居りますが、併し、會ーが四百人に限られてあるわけではなく、通常其の種類の交際會をさう名付けて、紐育のフォーアハンドレッド、ボストンのフォーアハンドレッド、サンフランシスコのフォアハンドレッドと云ふやうに云はれて居まして何處の都にもあります。これは智力的にも財力的にも所謂一流の人々の交際會なのであります。

又、下流社會には舞踏會がありまして、これが結婚媒介の機關になつて居ります。月に一度、或ひは二月に一度、舞踏會が催されまして多くの男女が會合致します。男は會員の紹介によつて入會して、そして、會費を拂ふのでありますが、女は會費を拂はなくても宜しいのです。女は會費を拂はなくともよいと云ふ規則が出來た理由は、

一ツには女は一般には經濟的の仕事をして居なかつたり、又、してゐても勞銀は安いからでありませうし、又、二ツには其の會が女を招待すると云ふ意味にもなつて居るやうです。

上流でも下流でも、さうして多くの男女が折々會合して居るうちに或る男女の間に戀愛が成立ちますと二人は全會員にそれを發表します。そして、日を選んで二人は全會員立合の上で結婚式を擧げます。結婚した後も勿論其の會の會員です。そして、全會員は一組の婚約者又は既婚者の品行の監視人です。もし、二人のうちどちらかゞ外の男と交際したり、外の女に接近して行つたりすることを會員が見付けるならば其の會員は其れを直ぐ會に報告します。そして、自分の相手方に不忠實であつた人は直ちに會から除名されます。除名される計りでなく其の除名の理由が其の人の名と共にあらゆる其の種類の會へ報告されます。そして、其の人はもう何處の會へも顔を出されないことになつてしまひます。ですから、何處かの會の會員である限りは先づ品行方正なものだとして安心して交際していゝわけです。

我が國ではまだ何處にもかう云ふ種類の結婚媒介の機關がないようですが、私が考へますには、我が國では先づ男子の基督敎青年會や佛敎青年會と云ふやうな團體に交際機關と云ふやうな性質を附加して、女子基督敎青年會や女子佛敎青年會にも交際機關の性質を附加して、そして、折り〳〵男子の方が女子の方を招待したり、女子の方が男子の方を招待したりしてはどんなものかと思ひます。其の他各大學や女子の學校の同窓會が矢張り交際機關の性質を附加して折々の懇親會を催して男女交際の便を計つたなら有益であろう思ひます。又、地方ならば靑年會と處女會が合同すると云ふ風に。そして、もし、それが好成績を示すならば追々いくつも〳〵の其れを目的とした會が設立されるであらうと思ひます。

亞米利加の交際會には相當の年輩の名望ある交際社會の女王と云はれるやうな人が會長となつて居て、凡ての事柄に關して監督してゐます。そして、丁年に達した娘は先づ其の會長に引き合はされて、それから、會長から全會員に紹介されるのであります。

血氣にはやる若い者を統率して、そして、風儀を亂さないやうにするためにはどうしても相當の年輩の有徳な人物の監督が必要であります。人生に經驗の富んだ、思慮の深い、有識な既婚者が嚴然と監督の位置に立つてゐなければなりません。

我が國に於てそう云ふものを新らたに造らうとするならばいろ〱の非難が起ることは火を見るよりも明かでありますから、本當にしつかりした有徳な、しかも、青年男女を理解し得る監督人を得ることが最大必要であります。青年男女の交際の自由、戀愛の自由は既でに〱長い間叫ばれて參りましたが、併し、人間は殊に若い者は、誤りに陷り易いものでありますから、全然個人々々の自由に任せて置く、つまり、放任して置くと云ふことを私は全然とりません。自由な交際を許すと同時に、其の交際には嚴重な監督が必要であることを私は認めて居ります。

前述の會以外にも亞米利加の青年男女の交際は至つて自由であるように考へて居る人が大分あるようでありますが、併し、其の交際は親か、又は他の年長者の嚴重な監督の下に行はれるのであります。娘が或る青年と交際するに付いては勿論先づ親なり又

は他の監督者の許しを得るのです。そして、談話に於ては遊戯に於ては全く自由でありますが、併し、場所は客間か又は庭のうちに限られて居て娘の居間に男子が出入することは絶對に許されません。

ピユリタンの感化を受けたのみならず其の外いろ〳〵な事情から世界第一の女尊國である亞米利加に於てさへ青年女子に男子を近かづけるに付いては其のやうに嚴重な監督を必要としてゐます。ですから、我が國のやうな世界で有數な男尊女卑な、男女關係のゆるつたい國柄に於ては嚴重にも嚴重な監督の下に青年男女の交際を許さなければならないでせう。男三人よれば、電車の中でも汽車の中でも直ぐ猥褻な話を始めます。田舍などへ行くと何處へ行つても眞面目な話は殆んど聞かれないような有樣です。實に性の亂用が彼等の人生の全部ででもあるかのやうな感が致します。

けれども、男女の交際を監督するに付いても嚴格が固陋に陷らないように注意することも亦大切であります。



道徳と藝術

文明に力を致す人間の活動は科學、哲學、政治學、自然を愛する心、交際、及び藝術であるが、このうちでも藝術は人類が野蠻狀態から一歩々々と遠ざかる道程を示す文明の記念碑となり得るものであるから格別の榮譽を擔ふ事が出來るものである。けれども藝術が其の卓越せる位置をしめて居ると云ふ事は藝術それ自身の性質によるものでもなく、又、其調子によるのでもない。唯其れが人道的である處、則ち、其れが社會の調和、正義進步と相關連するからである。

けれども或る一派の論者は云ふ。藝術を取り扱ふに當つては道徳上の標準を一切放棄する事が智的解放のしるしである。人生は其れ自身が最大藝術であり、それ自身が美であり善である。故に、趣味の人、優雅なる感受性を持つ人は道徳家の上に位するもので、彼の美性及び調和の理想は峻嚴な見にくい良心の躊躇なぞを追除ける力を持つて居るものであると。

實に、人の生活が善である時に、其れが猶又美である事は疑ふ餘地はない。凡ての場合に正當に活動し、貴き目的に向つて進んで行く人の生活は最上の美及び調和を現して居るに相違ない。けれども人の生活が美であるためには先づ第一に

其の人の生活が善になつて居なければならない。そして善であるべき原則は道德の原則でなければならない。其の上に人の生活が美であるためには其の生活を認知と靜觀の目的としなければならず、又生活を美となすためには、其れを實行しなければならない。そして其の實行、則ち、生活の樣式を定める原理は矢張り道德でなければならない。

前述の論者のやうに善と美とをごッちやにする事は二重の愚言である。第一に其れは價値に對する道德上の概念を、未だ、道德上不安定極まる概念と置き換へる事になる。美と調和と云ふものはどんな平面の上にでも其の平面が堅固な土臺の上にありさへすれば現す事の出來るものである。故にあらゆるものを押し除けて——勿論德義をも——彼自身の生活を美化しやうとする人は、彼自身の生活を最高に充實させるために道德上の努力をば、絕へず、放棄する事につめ、唯、最少限度の抵抗のある範圍内に於て、其のかたち計りを完全にする事に修養する。故にその論法から行くと人間以下の多くの下等のものに人間よりも美しいものが澤山あると云ふ事になる。けれども其れは道德上の善が條件である處の合理的再建設を、全く、缺いた靜止的な、則ち、進步のないかたち計りの美になつてしまう。

第二に善と美をごッちやにする事は鑑識を行爲と取り違へる。則ち、美しいものを見て居る事が美しい事をして居る事だと思ひ込んでしまう。そして人生を進

取的なものとはしないで、唯、單に、見世物としてしまう。かく、審美的概念と置き換へてしまう事は、道德から其の心を取り除けてしまふ事である。

美は確かに、道德上の善と相關聯するものである、其れが眞と相關聯して居るやうに。けれども、もし、或る研究者が最も美しい理論を工夫するやうに敎へられるならば、其の結果は其の研究者の智識に對する致命傷となる。丁度、審美的感情主義が人生に致命傷であると同じやうに。實在に離れる事なく考へるのが智識で、凡ての利益に一致して行動を取る事が人生である。もし、美が眞と善に加へられるならば、今云ふた、實在に調和して考へる事が智識であり、凡ての利益に調和して働く事が人生だと云ふことになり、そしてこれ等の動機に忠實な人には自然の結果として美は現はれるものである。

道德上の標準が藝術の標準とは全く、獨立なものだとするのを本當だとすれば、さすれば道德家は彼の標準を藝術の其れよりも、より根本的なものだとする理由が明瞭でなくなる。そして道德家は藝術の範圍に無斷で侵入してならぬ事をていよく、併し、はつきり宣言されるかも知れない。併し、道德家は藝術の範圍に侵入する充分なる理由を持つて居る。藝術は道德上の批評に從はねばならぬものである。

何となれば道德は一つの法則であつてこの法則があらゆる人類の利益に秩序を與へる。そして藝術もこの人類のいろ

〳〵の利益のうちの一つである。藝術は或る利益の表現であり、其の創造及び翫賞は人生の活動、様式、又は形象である。故に藝術から充分なるそして安全なる滿足を得るためには先づ外のいろ〳〵の滿足を或る程度迄得て居なければならない。藝術のための藝術と云ふ事は酒のための酒と云ふのと同じ馬鹿らしい事である。藝術は、他のあらゆる利益と同じく完全な社會全體としての社會の上にのみ榮へる事が出來る。そして人生を完全にするの法則、全體としての社會生活を益するの法則は矢張り道德である。

藝術は道德の批評を超越したものだと云ふ前述の主張は次に擧げる二つの誤想か或ひは其のうちの一つの誤想から起つたものである。

其の一つは、道德も亦藝術と同じやうに一つの利益であるから、藝術家が道德家に干渉しないならば道德家も亦藝術家に干渉すべきでない、と。けれどもこれは丁度競技者が醫者の忠告を退りぞけて、『健康なぞは耐力、腕力及び快活と云ふやうな事には無關係である』と云ふのと同じである。競技者が、唯、一時の間でもさう云ふ廣言を吐き得るのは其の以前に於て、既でに健康の原則を守つて居つた結果、今、丈夫だからである。これと同じで個人並びに社會を無視した藝術でも一時榮へるのは其の時既でに道德家の宣言した原則の上に社會なり又、人格なりが出來上がつて居たからである。藝術の根底は人の注意を容易にひく社會の罪惡や又は病的な分子にあるのではな

く、矢張り社會の完全を計る尺度でなければならぬ。

もう一つの誤想は、道德家が彼の法規を藝術家の其れと置き換へやうとして居ると云ふ事である。成程道德家は藝術を批評するに其の根底を道德の上には置くけれども彼は全然藝術に干渉はしない。故に道德家は或る一つの繪畫を見て其の善悪は云ふが併し、其の美醜に關しては何にも云はない。又、同じ理由で道德家は或る放縱な人の行爲に對しても其の行爲其のものに付いては何にも云はないが併し其の行爲と其の場合の周圍との關係に付いては是非する。換言すれば道德家の問題は或る特種なものに付いての問題よりも大きいのである。道德家の任は人事萬般の利益となる原則を定め、それを應用するのである。故に道德家の斷案は藝術と云ふやうな特種な範圍内の其れと置き換へられるやうな性質のものではない。道德は其等の上に位ひし其等を支配する權力を持つて居るものである。

人間は地上に現るゝや否や其の周圍を自身に都合のいゝやうに利用し始めた。山林を伐り拓いたり、地を耕したり、石を刻つて穀物を挽いたり。追々と諸種の道具や家具を造つたりしたのだが、これ等の技術が發達を經て藝術になつたのである。故に最初は唯客觀的の利益で滿足して居たのが次には其の客觀的の利益に主觀的の利益則ち美をつけ加へるやうになり、遂ひには客觀的利益の工業技術、主觀的利益の藝術とに別れるやうになつたのである。で、頭腦が緻密に發達した

現代人は口に美味を感ずると同じやうな滿足を色調及び音調から得る事が出來るのである。

そして藝術が益々盛んになる所以は其れが複雜な多樣な人間の要求を滿すからで、この利益のために藝術は支へられて居る。從つて藝術は愼重、正義、及び善意が最高の位置をしめて居る人生の範圍に來らねばならぬものである。であるから、プラトーは社會を騷がせるやうな詩人に付いて云つた。

『我々はさう云ふ詩人を愉快な、聖い、驚嘆すべき人として彼の前に跪き崇拜する。そして沒藥を持つて彼をアノイントし、彼に花冠を捧げる。だが、我々の國の外へ立ち去つて貰ふ』と。併し、プラトーは又藝術それ自身に付ひては次のやうに云つてゐる。『藝術家をして美と雅致の眞の性質を見るに明敏ならしめよ。而して青年等のために美しき景色、微妙なる音調の漲る健康なる社會を造らしめよ藝術家の創作則ち優美なる花が絶えず青年等の目及び耳を見舞ふやうにせよ、純なる健康なる地方から吹き來る微風のやうに。かくして小兒の靈魂をすら道理の美の中に調和せしめよ。』と。

藝術は人生の豐富に健康に資するものでなければならぬ。藝術に於ての取材及び修養の方面から見れば藝術は無限の力を伸ばす權利を持つて居る。併し個人並びに社會に關係をつけて見ると其處に動かすべからざる制限がある。社會は道德を藝術の上に置く事を命令する。

（ラルフ・ペリー）

海外事情

國際婦人參政權同盟會

元始時代の人間は自分自身のために考へ、自分自身の利益のために爭つた。けれども今の人間は自分は自分を取り卷いてゐる團體と同じもの、團體は自分と同じものであると云ふことを認めて、其の團體保存のために自分自身の生命を支へてゐる。處で、此の次の我々の努力は國際的の利益のために費すべきである。そして、婦人の完全なる參政權は人類を今迄よりもより安全な基礎の上に置く。婦人の聲は男子の聲と同じように我々の生活に必要である。男子の發言權と同じように婦人の發言權の必要を認めることは參政權よりもより以上の利益を人類に與へる。參政權は唯一ツの始まりである。今回の大戰爭は婦人も亦世界を文明化する力の一部であることを世界各國に知らしめた。戰爭に於て、婦人が男子の背後に立つて男子を援助した時彼女等は戰爭と云ふものゝ赤裸々な顏を始めて凝視した。彼女等は、飽くこと知らぬ戰爭の大きな口が愛する彼女等の子供の食物を奪ひ取ることを見た。其の獰猛なる口が彼女等の可憐な子供等を餓へさせ、彼女等自身を餓へさせ、未來の子供を餓死せしめた事實を見た。婦人は自分等が全く相關しなかつた大洪水の中へ打ちこまれて非常な苦しみを經驗した。そして、婦人は其の苦しみの原因を探索しなければならなかつた。そして、自身の責任と云ふことに覺醒した。そして、參政權の必要となつたのである。

と云ふやうな趣意の下に國際婦人參政權同盟會は第八回の大會を今年六月六日から十

二日迄ジエネバに於て開催したのであつた。第七回の大會は一九一三年ブダペストに於て開かれて、そして其の翌年に第八回の大會を開く筈であつたのが、とう〳〵今年迄延引してしまつたのである。一九一四年七月にはあの大戰爭の大波が起つて、そして、その恐しい大波に世界は押し流されてゐたのであるが、其の大波が遂ひに引ひたしまつた時、其の苦しみの中から新らたに生れた團體が現れ、そして、今回のジエネバに於ける大會は其の新しい國と、それから生き殘つた古い國とを集めたものだと云はれてゐる。

今年の大會は今日迄のどの大會よりも世界のためにより多くの望みを持つことが出來たと考へられてゐる。なぜなれば純粹に或る一國に限られてある問題に關しては中立を守つてゐて、しかも各國民に解放されてゐると同時に今迄には決して達せられなかつた廣い考へを持つて皆會合して來たのであるから、と。言語や人種や信仰には無關係に、生活と自由の問題が直接に論ぜられたと云ふことである。國と國とは爭つてゐても其の國の婦人達は此の大會に於ては全く同じ平面に立つて、（全世界が融和し得るために）凡ての建設的な政策に於ての最も重大な事實としてライフ其れ自身の尊貴を認めたのである。そして、未來の新しい世界に生れて來る人類の權利を確保するため、其の新しい世界は嫌惡よりもより大なる力としての愛を認め、利益よりも幸福を貴ぶ世界でなければならず、生活の美を幸福の第一條件として認めなければならぬと云ふことに付いて凡ての婦人が一致して居たのみならず、且ツ又、彼女等の運動は婦人自身の利益を計る計りでもなく、男子に對して反抗するためでもなく、併し人類に屬すべき自由を人類のために獲得しようとするものであると云ふことを表明したのであつた。

キヤツト夫人の努力によつて一九〇二年に此の國際婦人參政權同盟が設立された時には七ヶ國の贊成があつたので、そして、婦人參政權が實施されて居る處は僅かに濠洲のみであつたのであるが、今年の大會には二十八ヶ國が參列したのであつて、そして、二十一ヶ國の婦人が新らたに參政權を得たことの報告があつたそして、其の上に他の八ヶ國が同盟に加はることを申込んで來たと云ふことである。

此の大會に附ひで美談さして擧げられてゐるものは

或る婦人代表者は此の會に出席する資金を得るために特に勞働に從事したり、又、或る婦人の團體は代表者を送るために所持の裝飾品を賣り拂つたと云ふことである。

大會に於て讀み上げられた報告によると、約一百人の婦人が既でに國會議員になつてゐて、少なくとも五千人の婦人が市の役人になつてゐる。且ツ又新しい見地から此の同盟會は國際的の認識を既でに得たと考へられてゐる。と云ふのは昨年米國婦人參政權協會が大統領ウイルソンに書面を送つた時には其れは握りつぶされたにも拘らず、今回の大會に於ては六ヶ國の政府と、それから國際聯盟が正式な代表者を送つたと云ふことである。其處で、此の運動は今日迄の參政權運動の範圍を遙かに脫してゐると考へられてゐるのである。

今回の大會に於て九ヶ條の決議案が可決されたのであるが、其の要點は、此の大會は世界の婦人に彼女等の力を充分に働かすことを要求する事、國際的敎育と智識を用ひて未來の戰爭を妨止するために婦人の力を用ゆることを世界の婦人に要求する事、國際的立法部及び行政部に於て男子と同じ位置を婦人にも與ふべき事、則ち、敎育の平等、經濟上の權利の平等、人格に附いて家庭に關して平等な權利、平等なる道德の標準等である。

それから、一ツの決議を國際聯盟に送つたのであるが其れは次の如くである。

第一　ジエネバに會合した三十一ヶ國の代表婦人は正義と權利の原則を基礎とした強い國際的同盟のうちに世界の平和を保證する唯一つの望みがあることを信ずること、かくの如き基礎の上に造られた婦人國際同盟の發達と强固を計るために世界の婦人は彼女等の意志と聰明と感化力を用ゆること、そうして、あらゆる方法によつて世界至る處に平和と善意を確立するために努力すること。

第二　此の婦人國際同盟は婦人の幸福と婦人の位置に關する問題を考察するために婦人の大會を毎年召集すること。そして、其の大會の場所は國際聯盟が開催される處であること。

第三　婦人國際同盟は公娼制度廢止を國際聯盟に加入してゐる各國に勸告すること。

事である。

多くの政府の代表者は此の大會に於て、現在の狀態の改善のために、男子は婦人と共同すべきこと、或ひは單獨で働いてもよし、團體で働いてもよし、と云ふ意味を交はる〲説明し、ホンガリーを代表するシュピンメル夫人は『婦人の責任』と云ふことを辛辣に辯じ、生れは米國であるが英國を代表するアスター夫人は『新時代の態度』と云ふことを人生の事實を擧げては性急に話したと云ふことである。

此の婦人大會に集まつた各代表者全部のうちには國際的の頭を持つて居ないものもあつて、男子を全然仲間にしない別な婦人運動を企てようとしたものもあつたが、併し、キャット夫人は彼女の人格の力をもつて途ひに此の會を亂すことなく完全に導びき終はせたと云ふことである。則ち、世界の婦人を充分に民主化すること、それは單純に婦人としてゞはなく、併し世界人類の調和者とすることに成功したと云ふことである。國際婦人參政權同盟はこれから先き大なる活動の可能性をもつてゐるのである。けれども、全然男子を別にし、婦人に計り關する事柄を取り扱ふ局を國際聯盟を利用して設立しようとしたことは實に此の會の有益さを失はうとするものであつたと云はれてゐる。なぜなれば、人間の生活には全然男女別なものと云ふものはない。女に關するものは男にも關するものであつて、つまり、男と女が共力することによつて完全になる。男女が相互ひに助け合ふべきものである。婦人の考へが人類の幸福のために有効に採用されるやうになつた時に、婦人の智能はズン〱發達することが出來る。かくして、男子は人類のために努力するに當つて良友を得ることが出來るのである、と。

他人に善を爲さうとするならば極く小さい處から其れを爲さればならぬ。一般的善、たとへば、人道とか世界愛とか云ふやうな大規模の善事は惡黨、僞善者、及び、阿諛者の辯である。

―― ブレーク ――

ラッセルのソビエット露西亞觀

レニン——トロツキー——ゴルキー

露西亞過激派の統領レニンの名及び肖像は可なり永い間我が國の新聞紙上を賑してゐたが、併し、我々は一體レニンとはどんな人物であるかを知るに苦しんで居た。なぜなれば一方ではレニンは惡魔のやうな人間であると云ひ、又、一方では、レニンは天使のやうな人物であると云つてゐるから。處で、英國のベルトランド●ラッセルは今年の五月十一から六月十六日迄露國へ行つてゐた。そして、レニンと會見した時の印象、及び、レニンの思想に付いて紐育市で發行される七月號の『ネーション』誌上に書いてゐる。哲學者であり數學者であり、そして、落付いた立派な英國紳士があるラッセルの語るレニンは可なり眞に近いものだと信じて差し支へないと思ふ。で、次にラッセルのレニン觀を擧げて見る。

莫斯科に着いて後直きに私はレニンと一時間の對話をした。レニンは英語を可なりよく話すので、通譯が居たのであるが殆んどその用はなかつた。レニンの部屋には裝飾らしいものは殆んど無い。大きな机と、二ツの本箱さ、壁に掛かつた二三枚の地圖とお客用の柔かい椅子が一ツと其の外に硬い椅子が二ツ三ツあるだけである。レニンは全く奢りをしない男であると云ふことがこれで分る。彼は一寸見ては單純で非常に親しみがあつて、高慢な風などは少しも見へない。レニンと云ふことを知らないで逢ふならば彼が今日のような

大きな權力を握り、そして、世界に有名になつてゐるなどゝは誰も思ひ及ばないであらう。今日迄に私はレニンのやうに自尊の風を缺いて居る人を見たことがない。彼は訪問客を非常に注意深く目に力を入れて見つめる。それが恐しい程人の心を讀むように思へる。彼は大いに笑ふ。始めは其の笑ひが單なる親しさのように、愛嬌のように思へるが、併し、漸々と其の笑ひはむしろ冷淡であるように感ぜられて來た。彼の態度は專斷的で、そして、落付いてゐる。恐れと云ふことは彼の念頭には更にない。又、私利と云ふことを彼は全く考へてゐない。彼は理論の化身のような人間で、唯物史觀が彼の全身を流れてゐる血液であると云ふことを彼に逢つた人は誰でも感じる。

自分の理論を人に了解せしめようとする慾望と、自分の理論を誤解したり或ひは一致しない人に對して怒る處、ものを熱心に說明しようとする態度は大學の教授によく似てゐる。彼が多數の人を輕蔑してゐる處を見て、私は彼を智力的の貴族であると思つた。

私が彼に發した第一の質問は、英國の經濟上及び政治上の特質をどの邊迄理解してゐるかと云ふ點であつた。英國が第三國際同盟（ザ サードインターナショナル）に加入するには暴力の革命が必要であるかどうかと云ふ點にあつたのである勿論、私はその質問をぶつけに發したのではなく、遠まわしに聞いたのである。けれども、彼の答へは私には滿足でなかつた。彼は、今の處では英國は革命には成功しないこと、英國の勞働階級はまだ議員政治を全く見限つてゐないことを認めてゐた。併し、彼は、勞働黨內閣が組織さるゝことによつて勞働階級は議員政治を見限るようになると云つた。たとへば、もし、ヘンダーソンが總理大臣になつても大した仕事が出來なかつた時、其の時に勞働者が革命に傾くだらうとレニンは信じ且つ望んでゐるのである。此の理由からレニンは英國に於ける彼の共鳴者に望んでゐる、英國議會に出來るだけ多くの勞働者を送られることを。議員の選擧に熱中するなとは云はないが、併し、國會は全然信用するに足るものでないことを知るために議會へ行けと云ふとレニンは云ふ。

暴力を用ひての革命的の企ては英國人の多數にとつては不可能でもあるし、又、英國に於ては望ましいことでないと云ふ理由を私が彼に說明したが、併し、彼

にそれを信じさせることは出來なかつた。レニンは、其れは單に資本家的偏見だと思つてゐるのである。英國に於て可能なことは其れが何であらうとも血を流さなくても出來ると云ふことを私が話した時に、彼は其れは空想だとして受け取らなかつた。で、レニンは英國に關する智識、及び、英國人の心理を見ることは出來ないのだと私は思つた。實にそれも或ひは無理のない處であるかも知れない。何故なればマルクス主義は政治上の一切の事柄を純粹に物質上の原因に歸してしまつて心理的に見ることは出來ないのであるから。

次に私はレニンに向つて農民が多數である露國のような國に於て確實な共產主義の設定が可能であるかどうかを聞いた。處が、彼は其の困難なることを認めてゐた。そして、彼は農民が大汗を流して造つた食糧を紙幣に代へればならぬと云ふことを笑つてゐた。露國の紙幣の價値なきものであることを彼は認めてゐるのである。けれども、彼は又云つた。農民に價値あるものを與へられるようになれば一切が解決出來ると。そして、レニンは產業に電氣を應用することに望みをもつてゐた。つまり、產業組織を電氣化するのである。技術上それが必要だからである。けれども、それを完成するには十年はかゝると云つてゐた。そして、泥炭によつて電力を起すことを熱心に話してゐた。

露國の窮情を改善するためには封鎖が解かれることが最大急務であることをレニンは勿論認めてゐた。けれども、他國に革命が起らない限り封鎖が解かれるのは難しいと彼は思つてゐる。過激主義の露國と資本主義の國々との間の平和は常に不安定であることも彼は云つた。協商國は倦怠の結果か、或ひは協商國間の不和の結果、露國と平和を締結するかも知れぬ。けれども、其れは永續しないであらうとも云つた。レニンは他の共產主義者の領袖と同じように平和や封鎖を解くことに左程熱心でなく、其の點に關しては我々英國人の方がより熱心であることに私は驚いた。レニンは亦世界革命と資本主義の廢止によらなければ價値ある組織は設定されないと信じてゐる。故に、資本主義の國と通商を開くことは唯一時の彌縫策で、しかも、其の效果は疑しいものであると彼は思つてゐるように私には思へた。

レニンは露國の農夫には貧富の二階級の區別がある

ことを私に話した。そして、露國政府は貧乏な農夫を富裕な農夫にけしかけるプロパガンダをやつて、其の結果が暴行になるのをレニンは非常に面白いと思つてゐるとしい。レニンは、農夫を命令するような政治が永く續くであらう、農夫は自由貿易を望んでゐるからと云ふようなことを云つてゐた。農夫等は彼等が曾て所有したことがない程の多量な食料をこの二年間に於て持つたと云ふことは統計が示してゐるが、併し、それで居て彼等は我々に反抗するとも云つてゐた。彼は其れを非常に悩しげに云つた。私が彼に、彼は農夫の主地を造つたので共產主義を打ち立てたのではないと云ふ批評家に對して彼は何と答へるかと問ふた時に彼は其れは事實でないと答へた。けれども、彼は其の事實なるものに付いては何等の說明をもしなかつた。

　私が彼に發した最後の質問は、もし、露國に資本主義の勢力の中心が出來て共產主義の保存を困難ならしめはしないかどうかと云ふことであつた。熱心な共產主義者は、外國の資本國と交際することは彼等にとつての異說を普及し露國の現在の組織を不可能なものにすると云ふ恐れを持つて居ることを私は知つて居るから。彼も亦そう云ふ恐れを持つてゐるかどうかを私は知りたかつたのだ。併し、彼は、外國との貿易を始むることは困難ではあらうが、戰爭よりは樂であらうと云つた。

　彼は、又、云つた。二年以前には彼並びに彼の同僚は世界の反對に出逢つて到底生き殘ることは出來ないだらうと思つた、處か、今日迄無事でゐるのは、資本主義の國々がお互ひに妬み合つてゐるのと、利益の衝突があつたのと、それから、もう一ツは過激主義の宣傳の力である、と。それから、又、過激主義の宣傳書を以て彈丸に對抗すると云ふ提案をした時に獨逸人は笑つたが、併し、後の出來事は宣傳書が彈丸と同じように有効であつたことを證明したとも、レニンは云つた。併し、彼は勞働黨や社會黨が其の仕事に仲間になつてゐたと云ふことを認めてゐるようには思へなかつた。レニンは英國の勞働黨が英國の政府を極く狹い範圍に限つてしまつたゝめに露國に對する大規模の戰爭を不可能になしたと云ふことを知つてゐないらしい。

　實に、前にも云つた通り、もし、彼がレニンであると云ふことを知らずに彼に出逢つたならば、彼が豪傑

であると云ふことは相像をもしなかつたであらう。彼は餘まりに自分の意見にかたまり過ぎてゐて狹つ苦しい獨斷家であると云ふ印象を私は受けた。レニンの力は私が想像するに彼の正直さと勇氣と動搖しない信仰から來てゐる。マルクス主義を宗教的に信じてゐる處から來てゐるのである。彼は苦しめられた羅馬の基督教信者のやうに自由に對する慾望を持つてゐない。恐らく、自由に對する慾望は凡ての人類の不幸を救濟するために全心を捧げたいと云ふ慾望とは兩立し難いものであらう。もし、そうならば徹底した宗教心を持つよりは懷疑主義を持つてゐた方が遙かに幸福である。私は自分自身を共產主義者と信じて露國へ行つた。併しながら、共產主義に對して何等の疑ひを持つてゐない人に接觸したことによつて、私の共產主義に對する疑ひは千倍になつてしまつた。共產主義に對して計りでなく、一ツの信仰のためには人類を不幸に陷れてもよしとするあらゆる強い信仰に對して私は疑ひを持つようになつた。

　ラツセルは又トロツキーとゴルギーにも逢つた。それに付いて次のように云つてゐる。

　露國の共產主義者はトロツキーをレニンと同等な人物であるとは決して思つてゐない、併し、彼の人格ではないが彼の聰明さと人品はレニンよりも一層強い印象を私に與へた。併しながら、深く彼を知ることが出來る程私は彼さ接近することが出來なかつた。

　けれども彼の輝しい目、軍人らしい風采、怜悧さの光りは確に人をひきつける力を持つてゐる。房々した髮を持つた婦人に好かれさうな好男子である。さからはれさへしなければ非常に氣輕らしく、又、間違つて居るかも知れないが、彼は權力よりも虛飾の方を好む人のように思へた。そして、ナポレオンと比較して見たくなつた。共產主義に對する信仰は深いものであらうが、併し、私は其の深さを計つて見る機會を持たなかつた。

　ゴルキーはレニンとトロッキーとの非常に面白い對照である。私はペトログラードでゴルキーと簡單な會見をした。彼は病重くして病床に臥してゐた。到底快方には向ひそうも無かつた。彼は明らかに失望してしまつてゐる。露國に付いて私が何か云ふ度每に彼は露國

が非常に苦しんでゐると云ふことを力説して呉れと頼んだ。彼はレニンの政府をよしとしてゐる。私も、もし露西亞人であるならば矢張りそうするだらうと思つた。と云ふのはレニンの政府に滿足してゐるのではなく、レニンの政府に交はるものは一層惡いものであらうと思へるからである。誰でもゴルキーに逢ふならば露國民に對して愛情を感じずには居られないであらうそして、その愛情が今日の露國民の苦痛を見るに忍ばしめないで、マルクス派の氣狂ひ的の信仰を打ち破ることに努力するであらう。

私はゴルキーを非常に愛すべき人物と見た。私の逢つた露西亞人中でゴルキーが最も同情に富んだ人に思へた。私は彼の意見をもつと深く知りたかつたのであるけれども、彼は絶へず咳に苦しめられてゐて談話が非常に困難であるために、私はわざさ長く止まらなかつた。私の逢ふた智力階級の人、則ち、非常に苦しんだ人達は、皆、ゴルキーの爲したことに對して感謝してゐた。

唯物史觀はいゝものであらう。けれども、文明のうちにはもつと高尙なものがある。そして、其の高尙なものを愛することさが一つの救ひである。ボルシエビキは時とするさ藝術のために偉大なことをなしたと云はれてゐる。けれども、今迄に存在してゐるものを彼等は保存したに過ぎないとしか私には思へない。此の問題に付いて私がボルシエビキの一人に質した時に彼はうるさそうに其の問題を避けた。そして、云つた。新らしい宗敎を造る暇はないと同じように新らしい藝術を造る暇はない、と。確かに今日の露國は藝術の榮へ得る空氣でない。なぜならば、藝術は全く無政府的のものであつて組織さることを嫌ふものであるが、併し、今日の露國は組織計りであから。

ゴルキーは單身露西亞の智力的及び藝術的生活を保存るために出來得る限りを盡した人である。けれとも今、ゴルキーは死を急ぎつゝある。そして、恐らく、露國の智力的及び藝術的生活も亦死を急ぎつゝあるのであらう。



一人の從妹

原田琴子

「おや、いつ歸つたの？」

と私は覺えず聲を立てた、見違へるやうに肥つて處女らしくなつた從妹の浦子が小さな風呂敷包をかゝへて、窓の外に立つてゐたのであつた。

「昨日」

と、初々しく答へたぎりで浦子はかざしてゐた紫色の洋傘をすぐ閉ぢた、そして中庭の方へまわつた。

「北條はどう、佳い處なの？」

障子ぎはへキチンと坐つてほゝえんでゐる從妹の姿をみつめながら、私は懐かしい心持で問ひかけた。

「えゝ涼しう御坐んすわ……、姉さん、叔母さんはまだ退院なさらないの、Kの叔母さんはれもう退院してお家にゐらつしやるたらうつて仰言つてましたわ、そして姉さんに太郎ちゃんをつれて



是非北條へゐらつしやいましつて」

「左様た、なにしろ叔母さんが退院しないうちは、何處へも出かけられないの」

云ひながら私は、何でも思つた事をすぐ口へ出さずに居られないKの叔母の人の好い率直な態度を思ひ浮べて居た、そして自然にほゝえまれた。世話好きな叔母は三人の子供の外に親類の子供達たちまでひきつれて北條へ避暑に出かけたのであつた、前から叔母の家で家事を手傳つてゐた浦子はそれに同行したのであつた。

「それで浦ちやんはどうするの、また東京の叔母さんとこへ歸るのかい、それとも——何だか外に奉公の口があるとかつてお祖母さんは云つてたやうだけれど」

今年は割合に避暑客が少ないといふ事や、此方からたのんでやつた女中がよく働らくといふ事やそんな事を語り合つたあとでふと私はかう云ひ出した。すると如何したのか浦子は急に口を噤んでうつむいたきり、何とも返事をしなかつた、で私は重ねて何とか云はなければならなかつた。

「もうほんとにKには居ない事になつたの、そして奉公口つてどんなところがあるの、でも當分はまあ家に居るんでせう……默つてゐちやあ分らないぢやないの」

「だつて……姉さん、何故うちぢやKの叔母さんとこへおいてくれないんでせうね……」

見ると浦子はもう袂を額へあてゝゐた。かすかに肩がふるえてゐた。このむつちりした身體つき



が私の死んだ姉にそつくりであつた――

『それはね――』

といひかけて私は當惑した。そして同時に私の叔母――浦子の死んだ實母――が生きてゐた頃口ぐせのやうに『浦子はKへたのむ、Kへたのむ』と云つてゐた事を思ひ出した。

浦子は不幸な娘であつた。彼女が十六の春にそれまで永年の間リウマチスで寢てゐた母はなくなつた、そして翌年の正月には最早第二の母が來たのだつた。不幸な結婚をして夫にすてられたのだとかいふ繼母は若い、氣の利いた、そしてやさしい氣質の人であつた、彼女が忙しい店（家は雜貨商であつた）の手傳ひをしたり、幼ない浦子の妹達の世話をしたりする樣は他見眼にも甲斐々々しかつた。彼女は決して子供達を叱るといふ事がなかつた。

『まあいゝ人を貰つてよかつた』と私の祖母――浦子の母の實母――はいひ／＼した。實母の生きてゐた頃からT町の裁縫女學校へ毎日汽車で通つてゐた浦子は、卒業すると間もなく東京へ奉公に行くといふ話であつた。浦子の父は『なんでも商人がいゝ』と云つて京橋のある小間物屋へやつた、があんまりせまい家で坐るところもなくつて立つてゐなければならないとかで、とう／＼浦子はKの叔母の家へ歸つて來た、それから暫らく叔母の家にゐて後にまた横山町のおはぐろ問屋とかいふのへ父親がつれて行つた、ところがその家では三度のお惣菜も何も皆仕出やからとつて家では女中



にも臺所の用はさせず、たゞ子供をつれて外へ遊びに行くといふだけの仕事が一向身のためにならない——子供になにかねだられゝば買つてやるといつた風で、自然お小遣ひをつかふ事にもなる——といふのでまた暇をとつた、そして丁度Kの叔母のところでは子供が病氣で人手が足りないところなので當分手傳ふといふ事になつたのであつた。

「浦子もね、あのまゝぢやとても世間へ出せないよ、裁縫もまだ〳〵駄目だからね、よそへ奉公させるよりうちでみつしりしこんでやらうと思ふの」

その頃東京にゐた私はKの叔母のかういふ言葉をよく聞いた、それにはいかにもみうちの者らしい深切さがこもつてゐた。私もその方が浦子のためによりよからうと考へた、一つには死んだ浦子の母の心持が私の心にまざ〳〵と思ひ出されたからであつた。

春の末頃、私は思ひがけない母の病氣のためにこの故郷の家へ來なければならなくなつた、私は去年の暮に生れた子供をつれて、母が入院したあとの家の留守居に來た。子宮癌が大分手後れになつてゐるといふ母は非常な手術をした、浦子は東京からハガキへ鉛筆でかいた見舞狀をよこした、きまりきつた見舞ひの言葉しかなかつたものゝ、そのはがきをよんだ時に私はとりまぎれて忘れてゐたこの從妹が急に懐かしく、いとほしく思はれた。それから數日後に子供をつれて病院へ見舞に行つた時、丁度東京から見舞ひにきたKの叔母と私は偶然にも一緒になつた。ふと廊下へ出た時に

叔母は私に云つた。

『浦子のお父さんも妙な人だねえ、この間家へ來てそれはいやな顔をして浦子ももう大分ながくなりますね、今度は外へ奉公の口がありますからとかういふの、それは變ないひ方でね。浦子もうちに居たがるし、うちに居れば一日坐つて裁縫も出來るんだからと思ふんだけれど。うちではなにも是非浦子に手傳つて貰ひたいといふんぢやないの、たゞあの子が裁縫學校を出たといつても名ばかりで、羽織の衿もよくかへらないしまつだからどうかみつしりしごとをさせたいと思つてね、叔父さんも死んだお母さんのために、浦ちやんの世話だけはよくしてあげたいといふものだから――月々ちやんとお給金を拂つて、夏冬には銘仙の仕着せをして、そして使つてゐるんだのに、何が氣に障つてあんな事をいふんだらうね、浦子のお父さんは』

『左樣ですねえ』

といふ外に私は、なんとも答へなかつた、けれども心の中では密かに『叔母さんに遠慮するために浦子をKへおくまいとするのではないだらうか？』と考へた。浦子を死んだ實母の妹に當るKの叔母の家へおくといふ事は第二の妻の氣をわるくする！と叔父は思ふのではないだらうか、少くとも無意識の間にその感情がはたらいてゐるのではないだらうか。

私は今再びそれを考へた。がそれは浦子に向つては云へない事だつた。しばらく私は默つてゐた



無論浦子も默つてゐた。

『いつたいKの叔母さんも少しものゝいゝ樣が下手だからね、聞き樣によつてはさも〳〵恩にきせるやうな事をいふのがいけないんですよ、でもそれは叔母さんのくせでもと〳〵叔母さんは浦ちやんのために少しでもよいやうにと思つてはゐらつしやるんだけれど――』

お前のお父さんにはわるくとれるのだらうとは云ひきれなかつた。私はふと調子をかへた。

『そしてこんど行くといふ家はどんなところなの、何處なの、場所は？』

『どこですか……』

浦子はます〳〵うつむいてしまつた、がやがて低い聲で云ひ始めた。

『どんなところですか私はなんにも知りません……でもKの叔母さんは今よそへ行くのがいやだと云つては私の方で入智慧をするやうでこまるつて仰言るんですの……、そしてとにかく默つてなんにもいはずに行つてみて、ようく樣子を見て身のためにならなさうな家だつたら、出てお出でつて、そして叔母さんのお家では、お父さんがたのむといひさへすればいつでもおいて下さるつて……左樣仰言るんですの、叔母さんは私に縫はせて下さるつていろ〳〵いゝ仕立物をためてあるんですわ』

『さう、そして浦ちやん歸つてからなんかお父さんから話があつて？』



『いゝえなんにも。お母さんだつて私にはなんにもいひませんわ、默つてますわ』

『それは左様だらうとも』

私はそれ以上かういふ話をつゞけるのが堪へられなくなつた。私は立ち上つてお茶だんすから急須や、カステラの折などを取り出した。そしてお茶をついだり、カステラを切つたりした。一緒にお菓子をたべたりお茶を飲んだりする間に私はいくらかゆるやかな氣分になつた、とふと死んだ姉の事が再び私の心に浮んだ、私は姉とよくかうして一緒にお茶を飲んだものであつた……

『姉さん、こんなものですが』

云ひながら浦子は風呂敷包を開いてピーナットの鑵をとり出した。

『あゝあつちで出るのね、これが』

『えゝこれをおみやげに買つて來ましたらばね、お母さんも兄さんもこんな不味いものはないつて云ふんですの……』

浦子の眼にはまた新らしい涙が見えた。私は氣の毒のやうな、少し滑稽のやうな感じもした。が心の底の方には熱い思ひが流れた。そしてこの內氣な從妹の心を慰めるための言葉が欲しかつた。がまたそれをはゞかる不思議な心が何處やらにあつた。

『浦ちやんの家は店は忙しいし小さい子供はあるしするからほんとにお母さんも大變ですよ』

却てこんな言葉が出た。

明日は一緒に母を訪ねて病院へ行かう、私はそれを約束した、そして浦子は歸つて行つた。

その翌日私達――私と浦子と子供と女中――は一番の汽車でT町へ行つた、女中が子供を負つて居るので浦子は私のために荷物を持つてくれた、荷物――それはお辨當にと今朝こしらへて來たおすしのお皿であつた――浦子はまだ新らしいかすりの銘仙の單衣に、四季の花模樣のついた羽二重の帶をしめてゐた、それは去年私のやつたものであつた、着物は多分Kの叔母がこしらへてくれたものであらうと私は考へた。

停車場でも汽車の中でも浦子はあまり口數をきかなかつた、私も默つてゐた。私は子供がむづかりはしないかとそればかりが氣にかゝつた。そのくせ子供は元氣よく背中の上で笑つてゐるのだが。

病院では母は早朝からのこの思ひがけない來客をよろこんだ、そして附添にたのんで町から餅菓子を買つて來させたりした。母はまだ起きられなかつた。で私達はベツドの上から見えるやうなところに子供を坐らせて、あやしたり、ベツドのそばへつれて行つたりした。子供が眠ると雜誌をよんだり、家の有樣を母に話してきかせたりした。

『浦子はまあしばらく家にゐるんだらう』何かの折に母はさう云つたが浦子は曖昧な返事をした。



私達は持つて來たおすしを附添の人が煮てくれた、冬瓜のそぼろかけとで簡單なおひるをすました。そしてまた遊んでから三時幾分といふ汽車で歸途についた。

『あしたはお墓まいりに行きますの』

停車場から家へ歩いてかへる時に浦子は低くかう云つた。一緒に行かうとあやふく口へ出しさうになつた言葉を私はのみこんだ。夕空に漂ふ綿のやうな白雲が妙にさびしく眺められた。

その翌朝――今床をはなれたばかりの私が、井戸端でようじをつかつてゐた時に――ふと頭を上げた私はすぐ眼の前に昨日のみなりのまゝの浦子がたゝずんでゐるのを見た。私はびつくりした。

『東京へまいります、一番でお父さんと――』とほゝえみながら浦子は云つた。

『まあ、左樣、そして――何處へ行くの？』

『Ｋへ――』

『おやまた此方へ歸るのね、Ｋへ挨拶に行つて一度家へ歸つて、また出なほすんでせう』

『否え、左樣ぢやあないの――ずつと、またすぐよそへ行くんですつて』

『何處へ？』

『…………』

浦子は答へなかつた、そして默つておじぎをした。もう時間もないのだつた。



「では姉さん。」

私は何だか分らない事を口の中でつぶやいた。あまりにも殘り惜しかつた、けれど引とめろわけにも行かなかつた。浦子の姿は門の方へ消えた。

子供にお乳をやつて、朝飯をたべて、やがて女中が子供をつれて遊びに出かけてから私は本を開く氣にもなれずぼんやりと机にもたれて考へこんでゐた、そこへ祖母が訪ねて来た。（私の両親は祖母と別れて暮してゐた）、私達の話題はぢきに浦子の事に移つて行つた。

「あの子もなア、所詮いゝ支度は出來ねえから、いゝところへは嫁かれめえ」

それがまた一つの氣がゝりだと云つた風に祖母は眉へ皺をよせた。

「支度つて——支度でいゝところへ嫁けるものなら、幸福になれるものなら、私は自分のものをみんな浦子にやりますわ——」

私はさう心の中で云つた。そして堪へられぬ程悲しい思ひがした。

窓の外の青葉の枝には涼しい風がそよいでゐた。

血色の文字

The Scarlet Letter

ホーソン作

邂逅（三）

『この女をお調べなさい。兄弟よ。この女のたましいにとつては大事なことであり、從つて、知事の云はれる通りあなたのたましいにとつても大事なことであるから。そして、事實を吐くやうに此の女に勸告なさい！』とウイルソン牧師は云つた。

若いデムステル牧師は首を垂れて、恰も、默禱でもしてゐるやうであつたが、此の時、進み出て來た。

『ヘスター・プリンよ。』彼は張出椽から身をかゞめて女の目のうちをしつかり見つめながら云つた。『お前は、今、この方の仰有つたことを聞き、そして、私の責任のある處を知つたらう。もしお前の魂の平安となり、そして、此の世で受ける刑罰が却つてお前の魂の救ひに效果があると感ずるならば、お前と一所に罪を犯し、そして、お前と同じやうに苦しんでゐる人の名を明らさまに

云つてしまうことを私はお前に命ずる。彼に對する誤まつた憐み、誤まつた優しい心から彼の名をかくすやうなことをしては却つてよくない。お前は私を信じるだらう。ヘスターよ。たとへ、彼は彼の高い位置から下つて、そして、其の臺の上にお前と一所に立つても、却つて、其の方が罪をかくして苦しい一生を送るよりもどんなに樂だかしれない。お前がかくしてゐることが彼のためにどうなるとお前は思ふ。それは其の男を誘惑する。いや、強制する。犯した罪に更に僞善をつけ加へさせることになる。神樣がお前にこの明るみの恥をお與へになつたのは、これによつて、お前の心のうちの惡と、外側の悲しみにお前を打ち勝たせようとなさるのだ。お前の唇に今捧げられてある盃は苦(にが)い、けれども、有益だ。恐らく、彼は其の盃を自分から取りに出る勇氣を缺いてゐるのかも知れない。そして、お前も亦、其の盃を彼に拒んでゐるのであるこさを考へて見なければならない。」

この若い牧師の聲は美しく、ゆたかに深く、そして、きれぎれであつた。彼の言葉の直接の意味よりも非常に美しく現れてゐた彼の感情が聞いてゐる凡ての人の心をふるへさせた。そして、凡ての人の同情を一ツに集めた。ヘスターに抱かれてゐた赤子でさへも彼の感情の影響を受けて、それ迄はポカンとしてゐた目をデムスデル牧師の方へ向けて、そして、半分は嬉しそうに、半分は訴へるやうな聲を擧げて其の小さい手を彼の方へ伸した。彼の言葉には深い／＼力がこもつてゐたので

見物人は、ヘスターが必ず彼のすゝめに從つて、相手の男の名を云ふであらうと思つた。さもなければ、其の男自身がどんなに高い位置の人でも、又は、どんなに低い位置の人でも良心の責めに堪られなくなつて必ず出て來て、そして、ヘスターの傍へ登つて來るであらうと思つた。

けれども、ヘスターは首をふつた。

『女よ、神の惠みが屆かぬ處迄罪を犯すな！』とウイルソン牧師は前よりも荒々しい言葉で云つた。

『その小さい赤子でさへ、お前が聞かされた勸告に贊成し、そして、それに從ふ意志を現すために神樣から聲を授つたではないか。相手の名を云へ。お前の改悛の仕方によつてはお前の胸から其の血色の文字が取り去られるかも知れない。』

『決して、申ません！』とヘスターは答へた。ウイルソン牧師の方は見向きもせずに、青年師牧の深い苦しみをたゞへた目を見つめながら。『烙印は餘まりに深う御座います。それは取り去られるものでは御座いません。それに私は私の苦しみとそれからあの方の苦しみとを一所に堪へ忍んで居たう御座います。』

『云へ、女！』と郡集の中から臺の近くへ一人の男が進み出て來て、冷膽に、そして、嚴格に云つた。『云へ、そして、其の赤子の父を明らかにせい！』

『私は申しません！』と、ヘスターは其の聲の主を確に認めて、そして、死んだやうに青くなつて答へた。『私の子供には天の父を求めさせます。此の子は此の世の父を決して、知つてはなりません。』

『とても云ひそうもない！』手を胸にあて、前こゞみになつて自分の勸告の結果を待つてゐたデムスデル牧師はこうつぶやいて長いためいきをしながら、體をひつこませた。『女の心の不思議なあの力、そして、あの廣さ、とても云ひそうもない！』

憐れな罪人の強情な態度を見て、こう云ふこともあるであらうと、注意深く用意をしてゐたウイルソン牧師は彼女の罪の詳細に就て、群集に向つて演說を始めた。絶へず言葉を恥の文字に關聯させることを忘れずに。彼は定期の時間よりも長く彼の言葉を群集の頭の上にころがしてゐたので、群集には其の文字が今又更に新しく恐しいかたちに見へ、其の文字の色は地獄の底の火炎から持つて來たやうに思へて來た。其の間、ヘスター・プリンはガラスのやうな目をして、疲勞の極に達した無頓着な樣子をして恥の臺の上に立つてゐた。彼女は朝から人間の力が堪へ得るだけ堪へて來たのだつた。彼女は餘まりに烈しい苦痛から、氣絶をして逃れやうとするやうな氣質でなかつたので、彼女の肉體の力は奪はれずに居ながらも、彼女の精神は石のやうにかたい無感覺の殼の下に僅に隱れてゐることが出來るだけであつた。こうした狀態にあるヘスターの耳に演說者の聲は呵責な

く、けれども、無益に唯囀いてゐた。ヘスターの刑罰の終り頃に、ヘスターに抱かれてゐた赤子は烈しく泣き出した。ヘスターは赤子の泣くのをしづめようとはしてゐたが、併し、それは唯機械的であつて、赤子の苦しみに同情してゐるやうな様子はなかつた。依然さ、かたい態度をしたまゝ、彼女は獄屋へ連れ戻された。そして、鐵の大きな金具を付けた門の中へ姿をかくした。彼女の後をのぞいてゐた人々は獄屋の中の暗い廊下に血色の文字がもの凄い光りを投げたと囁いてゐた。

再び與謝野晶子様へ

與謝野晶子様から又御叱りを受けました。晶子様は『太陽』九月號に次のように書いて居られます。

『山田わか氏が六月號の『婦人と新社會』で「一度與謝野氏は人間の肉體を分析して細胞にすれば、男の細胞も女の細胞も全然同じである。だから、男と女を區別するのは不法であると云ふやうなことを主張して居りましたが、これは本當に可笑しな說ださ考へました」と云つて、私が全く男女の性別を無視した人間のやうに斷定して居ました。私は非常に驚いて、其の引用された私の文章の出所を山田さんに問ひました所が、八月號の同誌で大正五年八月の「太陽」に載せた私の文章から「男女はもと〳〵父母の生理的事情からその折々に生ずる差別であつて、永劫不變の男性と云ひ、女性と云ふ生活素が人間の肉體の中に決定されて存在する譯でないから、男女の性が人の差別を規定する原因であるとは考へられない」さ云ふ一節を引いて、「男性と云

ひ女性と云ふ生活素が云々」と云ふのと、「男の細胞も女の細胞も全然同じである」と云ふのとは同じ意味では無いか、自分は全くあなたのお考へを取違へて居ないと云ふ意味のことを答へられました。

「私はこの意外な山田さんのお答を讀んで、また一ツの驚きを加へました。新しく引用された文章は確かに私のものです。それは私の感想集「我等何を求むるか」の中に「男女の本質的平等觀」と題して收めてあります。私は明かに性的差別を認めた上で性的差別が人間としての能力の優劣の差別にはならないと云ふことを其の一文で述べて居るのです。山田さんは全文を讀まれなかつたのみならず、引用された一節さへ正しく讀まれて居ないのです。「「生活素云々」の文字の遣方は拙劣ですが、それは七八行の後にある「生活の價値を平等に開展して行く可能性」と云ふものと同じです言ひ換れば、人間の本能には男性とか女性とかで優劣の差別を附けられるものが決定的に存在して居ないと云ふ意味を述べたのです。たとへば人間の本能である愛には性別が無いので證明することが出來ます。『生活素」などと下手に云はないで、命とか、個性とか、本能とか云へば好かつたのでせう。山田さんに今一度あの全文を讀んで頂きたいと思ひます。今に於て私は言ひます。山田さんのように他人の文章をそゝつかしく讀む人は尠いでせう。猶山田さんには前の方の「細胞云々」の文章の出所を擧げて下さる義務が殘つてゐます。若し假にも私があのやうな亂暴な文章を書いたことがあつたとすれば、私は自分の頭腦を疑はねばなりません。』

處で、

生活素＝愛＝命＝個性＝本能

と見るのと

生活素＝細胞

と見るのとどちらが正しいか？

もし、前者が正しくて後者が誤まりならば『そゝつかしい』と仰有る御叱を甘んじて受けなければなりません。けれども、そうではなく、前者が誤りで後者が正しいならば晶子氏は不法に人を御のゝしりになつたことになります。

念のために申して置きます。愛、命、個性、本能は心理學上の學術語で、生活素と細胞は生物學上の學術語であることを。

編輯を終りて

暑い〳〵と云つてゐるうちにいつの間にか庭の立樹の葉はカサ〳〵と音を立てるようになりました。もうワセの稻は金色を帶びて浪打つてゐることゝ思ひます。時々氣まぐれな怠け者らしい蝶がそこらを迷ひ歩いてゐる外には、群をなしてセッ〳〵と働いてゐた蟻達は大方姿を隱してしまつたようです。取り入れがもうすんだのでありませう。けれども、農家の取り入れはこれから始まります。私達は勤勉な其の田舍の人達に感謝しなければなりません。同時に私は仕事の種類こそ違つても其の田舍の人達に負けずに勤勉に毎日働いてゐることを秘かに誇りに思つて居ます。

私の書齋の窓の下を、秋晴れのした麗かな朝日を綠色の或は淡桃色の日傘に受けて、女學生が通ります。セルの脊廣にステッキと云ふ瀟洒ななりの會社員らしい人も通ります。植木屋さんがお辨當箱下げてお向ふの庭へ這入つて行きました。お隣りのお庭には木から木に棹がかゝつてすゝぎ上げられた小さい着物が幾枚かひろげてあります。洗濯物をかけられる筈でないお庭の木も小さい子達のためだと思つて我慢するでせう。庭で私は生きとし生けるものゝ生活の此の姿は何を意味して居るであらうかと時々考へます。そして造るのだと思ひます。何物かをあらゆる生物が毎日々々創造して行くのだと思ひます。そして、自分も其の創造の業の仲間入りして居るのだと思ふことは本當に感激に滿ちた生活だと思ひます。

本誌定價表

一册	金二十五錢	送料五厘
六册	前金 金壹圓四十錢	（送料共）
十二册	前金 金貳圓七十錢	（送料共）

○誌代及郵税は前金の事○郵券代用は五厘切手にて一割増○廣告は御照合次第御相談いたします

大正九年九月二十三日印刷納本
大正九年十月一日發行

東京四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人 山田嘉吉

東京神田區仲猿樂町十七
印刷人 大杉直次郎

東京四谷區南伊賀町四一
發行所 婦人と新社會社
振替東京五三六八八

新婦人協會機關

十月一日發行

女性同盟

郵税共二十一錢

創刊號

宣言

一婦人の能力を自由に發達せしめるため、男女の機會均等を主張すること。

一男女の價値同等觀の上に立ちて、其の差別を認め協力を主張すること。

一家庭の社會的意義を闡明すること。

一婦人、母、子供の權利を擁護し、彼等の利益の增進を計ると共に、之に反する一切を排除すること

目次

發行所 東京市外田端四四五 振替東京五〇九〇〇番 新婦人協會



『婦人と新社會』
大正九年十月一日發行
大正九年九月二十三日納本
大正九年二月二十三日第三種郵便物認可